

夜の美容室で整えられるのは髪だけじゃない♡

お得意様だけの秘密のマッサージでイカされる私

夜果堂書房／高瀬ザクロ

「すみません、遅くなっちゃいました……！」

慌ただしくドアを開けた瞬間、ふわりとシャンプーの香りが鼻をくすぐった。

閉店間際の店内は静まり返っていて、奥の大きな鏡に片桐さんだけが映っている。鏡越しに目が合った瞬間、片桐さんは柔らかな微笑んでくれた。

「大丈夫ですよ。……今日も残業だったんですか？」

その声に胸の奥がじんわりと温かくなりながら、私は椅子まで案内される。肩にケープをかけてもらっただけなのに、心臓がどきどきして落ち着かない。

片桐さんが道具を揃える横顔を、鏡越しにそっと盗み見る。

真剣な表情があまりにもかっこよくて、思わず息を止めてしまった。

（……やっぱり、今日もかっこいいなあ……）

私が始めてこの美容院に来たのは二か月前。

友達のヒカリに「雰囲気落ち着いてておすすめだよ」と紹介されて、軽い気持ち

で足を運んだのがきつかけだった。

施術中、なんの気なしに会話をしているうちに、私は最近、彼氏に浮気されて振られたことを話してしまった。

本当は誰にも言うつもりなんてなかったのに、ふと口からこぼれて。

思い出した瞬間、涙が止まらなくなった。

「大丈夫ですか？」

涙でぐしゃぐしゃの顔に、そっとタオルを差し出してくれたのが片桐さんだった。

その仕草は本当にさりげなくて、でも驚くほど温かくて。

胸の奥がふっとほどこけて、私は情けないくらい泣いてしまった。

片桐さんは、責めることも笑うこともせず、ただ静かに私の話を聞いてくれた。

普通の人なら失恋の痛みは友達とご飯を食べに行ったり、旅行へ行ったり、温泉で気分を変えたりするんだろう。

でも、私はそうできなかった。

——ただ、片桐さんに聞いてほしかった。慰めてほしかった。

あの日から、私は気づけば依存するように、この美容院に通うようになっていた。

今日の片桐さんは、耳に小さなシルバーのピアス。

ちよつと普通の人には着こなせないようなキザな革ジャン。下には白いシャツ。でも嫌味じゃなく、長身にすつきりと馴染んでいる。

本当に雑誌から抜け出したみたい。

横顔は無骨でクールなのに、笑ったときは驚くほど柔らかくて。

そのギャップに、胸が何度も跳ねてしまう。

あの日、低い声で囁かれた「大丈夫ですよ。……男なんか、星の数ほどいます」。背筋をぞくりと駆け抜けた感覚を、私は今でも鮮明に覚えている。

もっと触れてほしい。もっと一緒にいたい。

その気持ちを抑えられなくて、私は毎週のように通い続けてしまっている。

「前髪が気になるんです」

「枝毛が増えちゃって……」

そんな言い訳ばかりを並べて――

「今日は、どこを整えましょうか？」

静かな声が頭の上から落ちてきた瞬間、心臓がぎゅっと縮まった。

「えっと……」

すぐに答えられなくて、曖昧に笑ってごまかす。

(……どうしよう。もう整えるところなんてない……)

前髪はこれ以上切れないし。

毎回のトリートメントで髪はつややかにまとまっている。

鏡を見ても、不満なんてひとつも見つからない。

(……髪の毛、これ以上は短くしたくないし……どうしよう……)

無意識に、指で髪をくるくるといじる。

サラサラと流れる感触が指に絡むたび、胸の奥はますます乱されていく。

(……いっそ、パーマでもかけちゃおうかな。そうしたら少し髪が傷んで、ケアを

理由にまた通える……)

必死にそんな小さな作戦を頭の中でめぐらせながら、私は俯き加減に笑った。

その様子を、片桐さんはじっと見つめていた。

長い指がハサミを弄びながら一拍置いて——ふっと、柔らかく声をかけてくれる。

「……今日はヘッドマッサージにしましょうか。リラックスできますから」

「えっ……でも、今日そんな予算なくて……」

慌てて答えると、片桐さんは小さく首を振り、私の目をまっすぐに見つめて優しい笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ。いつも来てくださってる、お得意様だけの特別サービスです」

シャンプー台に横たわると、目の上にガーゼがそつと置かれた。

視界が暗闇に閉ざされる。

——そのぶん、頭皮に触れる指先の感覚がいやに鮮明に浮き上がる。

「強さ、大丈夫ですか？」

耳元に落ちた声は、低くて穏やか。

体の奥まで沁み込んでくるようだった。

「……はい。気持ちいいです」

「よかった。毎日お疲れですよね、少しでも楽になってください」

温かな掌と落ち着いた声。

それだけで胸の奥がじんわり熱を帯び、鼓動が落ち着かなくなる。

「頭皮、少し固いですね」

「……そうなんですか？」

「ええ。お疲れの証拠ですよ」

額の生え際をぐっと押されると、血がじわっと巡って、頭がふわりと軽くなる。

「デスクワークが多いんですか？」

「はい。座りっぱなしで……」

「やっぱり。首から肩に負担が来てますね。触ればすぐにわかります」

断言されただけで、胸の奥がくすぐったくなる。

（……私のこと、ちゃんと見抜いてくれてる……）

指先は前頭部からこめかみへ移り、円を描くようにゆっくりとほぐしていく。

「……あ、視界がすごくクリアになったみたい……」

思わず小さな声が洩れる。

後頭部を支えられ、親指でぐっと押し込まれると、堪えきれず息が跳ねた。

「ここは首から血流が集まる場所なんです」

「……すごい……気持ちいい……」

耳の後ろをそつとなぞられた瞬間、ぞくりと背中が震える。

「っ……」

ガーゼの下で目をぎゅっと閉じる。

（どうして……耳を触られただけで、こんなに……）

やっぱりいつものシャンプーとは違う。

（……こんなに気持ちいいの、サービスで受けていいのかな……）

一定のリズムで押されるたび、体が溶けていくみたいに軽くなる。

視界を閉ざされたまま、意識はふわふわと漂って――。

……ふと気づいた。

下着の中に、温かな手のひらを感じる。

（え……なに……？）

くちゅ、くちゅ……と濡れた音が耳に届くたびに、腰の奥がじんじんと熱を帯び、境界がゆっくりと溶けていく。

（えっ……？　これ……夢？）

片桐さんの指先の軌跡が、甘い混乱を確かに刻んでいた。

クリトリスの上で、中指と薬指がくるくると回る。

ぬるりとした水音が、くちゅ、と静まり返った店内にいやらしく広がっていく。

やだ……本当に、片桐さんの指が私のクリを触ってるの……？

——ただ撫でるだけじゃない。

クリトリスを軽く押し込みながら大きく回したり、細かく、きゅっ、きゅっと刻むように速めたり——その動きの変化が体の奥で小さな火種を焚きつける。

くちゅ、くちゅ、くちゅ……

水音が響くたび、耳の奥まで恥ずかしさが痺れへと変わっていく。

——ああ……ダメ……そんなふうになれたら、私、もうおかしくなっちゃう。

指はすっと奥へ潜り、入り口をなぞる。

とろとろに溢れた蜜をすくい上げ、クリトリスに塗り広げながら回す。

——いや……やだ……私めちやくちや濡れてる……！

クリトリスがどんどん固くなって、ぷつくりと膨れているのが自分でもわかる。

（ダメ、腰が勝手に動いちゃうよお……！）

片桐さんは何も言わない。

黙って、ひたすら弄り続ける。

やめてって言わなきゃいけないのかな——そう分かっているのに、言葉が出ない。ただ、心のどこかが——本当は、やめてほしくないと叫んでいる。

くちゅ……くちゅ……

——ダメ、声が出ちゃう。出したくないのに、もう止められない。刺激が重なり、全身の力が抜け落ちていく。

「あっ……だ、ダメ……っ！ イッ……ちゅう……っ♡」

その瞬間、腰の奥から熱い痺れがドンと弾け、背骨を駆け抜ける。

全身がびくびくと痙攣して、シャンプー台の上で震えが止まらない。

——あああつ……♡ 私、本当にイッちやつてる……。

やだ……イッちやつた……♡ 目隠しされたまま……片桐さんの指で……っ♡

やばい……こんなの……やばいよ……。

必死に心の中で繰り返しながら、余韻に吞まれていた。

けれど、その余韻に浸る間もなく、またクリトリスを指がなぞる。

「ひゃあつ……だ、ダメ……っ！ イったばかりなのに……っ♡」

悲鳴みたいな声が勝手に漏れる。

耳元に、落ち着いた声が降ってきた。

「……ここも、マッサージ。ね。秘密のサービスですよ」

その低い囁きと同時にぷっくり腫れ上がったクリトリスが容赦なくこね回される。くちゅっ、くちゅっ、ぬちゅぬちゅ……。

「ここも、リラックスしないと。ですよ、ね？」

いやらしい水音がシャンプー台に響き渡り、耳の奥にまで染み込んでくる。

「やつ……あぁっ♡　だ、ダメ……っ♡」

腰が勝手に浮き、脚の付け根がびくびくと震える。

中指と薬指がクリトリスをぎゅっと挟み、左右にぐりぐり擦り潰す。

——やぁ……ダメ……クリが……硬くなってるの、わかっちゃう……っ♡

「ひゃっ……っ♡　あっ……♡　いやぁ……っ♡」

愛液を塗り重ねられるたび、感度が跳ね上がり、声を止められなくなる。

「……もう、こんなにぷっくりしてますよ？　わかりますよね？」

耳元に落ちた囁きと同時に、指先がくるくる、きゅっきゅっとクリトリスを刻む。

「ひゃああつ……♡ ま、また……イク……っ！ イツちゃう……っ♡♡」
けれど——寸前で、ぱっと指が離される。

駆け上がっていた絶頂は無慈悲に断ち切られ、思わず喉が詰まる。

「……！」

次の瞬間、濡れきった膣に一本の指がぬるりと沈んでくる。

イキかけて熱を持った余韻がまだ身体に残っているまま。

ただ一本の指で、内壁を優しくなぞられるだけ。

（や、やだ……さつきクリでイキかけたのに……）

「……どうしたの？」

耳元に低い囁き。

「……あのまま、クリトリスでイきたかったのかな？」